インドにおける野生、近代、神霊祭祀

京都大学　人文科学研究所　准教授
石井　美保
〔お問い合わせ先〕 E-MAIL：mishii@zinbun.kyoto-u.ac.jp

研究の背景

地域の土地や自然に根ざした宗教祭祀は、人類学における重要な研究テーマです。なかでも精霊や神霊への信仰は、人間と自然、また超自然的な存在との関係性を表すものとして注目されてきました。近年では、環境保護や環境運動との関連から、土着の宗教祭祀の役割に着眼した研究が進められています。こうした背景の下、私はインドの南カナラ（カルナータカ州沿岸部）で、ブータと呼ばれる神霊の祭祀に関する調査研究を行ってきました。

研究の成果

南カナラの人々は、山野に棲むとされる神霊の祭祀を通して、土地や自然と独特な関係を取り結んできました。また、神霊祭祀は村落部の政治経済や、地域を超えた社会変化の中で重要な役割を担ってきました。なかでも注目すべきは、神霊祭祀と近代法、そして環境運動の関係です。神霊祭祀は、それに伴う権威や名誉を求める人々の競合の的となってきましたが、植民地期以降、祭祀をめぐる争いは近代法による審判と神霊の託宣という二重の規範の下で展開されています。また近年、この地域で進展している大規模開発への反対運動の中で、神霊は守られるべき自然の象徴としての役割を担っています。一方、開発地域の調査からは、工場施設において新たな神霊祭祀が勃興していることが明らかになりました。近代法の導入や開発をはじめとする社会変化の中で、人々が培ってきた自然や神霊との関係性は新たな局面を迎えていますが、そこには「近代化による伝統の変容」という構図では分析できない複雑さがはらまれています。

この研究の成果をまとめた拙著『環世界の人類学』では、植民地期から現代に至るまで様々な社会変化を経てきた南カナラの人々と神霊の関係を描くことを通して、人々の生とそれを取り巻く世界がいかに形成され、変容していくのかを明らかにしています。

今後の展望

今後はさらに、インドにおける環境政策と環境運動、多様な宗教実践の関係を検討していきたいと考えています。私の研究を貫く問いは、現代インドに生きる人々にとって「自然」とはどのように現出しているのか、というものです。これまで私は、神霊祭祀を通して人々の前に現れる「野生」としての自然に着眼してきました。さらに検討されるべきは、「資源」や「母なる大地」のように、それぞれの主体によって異なる自然の様相が立ち現れ、それらが交錯しあう状況です。加えて検討されるべきは、動植物や鉱物資源をはじめ、山野に存する非人間的存在が、自然をめぐる人間の諸実践にいかに複合的な影響を及ぼしているのか、という問いです。今後はインドの事例をもとにこれらの問いへの探究を深め、その成果を日本における人間と自然の関係についての考察につなげていきたいと考えています。

関連する科研費

2009－2012年度　若手研究（B）「南インドにおける神霊祭祀と憑依儀礼に関する人類学的研究」
2014－2017年度　基盤研究（C）「開発・環境運動・宗教実践の交叉と動態に関する人類学的研究」
2016年度　研究成果公開促進費「環世界の人類学――南インドにおける野生・近代・神霊祭祀」

写真１　カルナータカ州マンガルール郡の調査村で催されたブータの儀礼の様子

写真２　水田の傍らにたつ神霊の祠

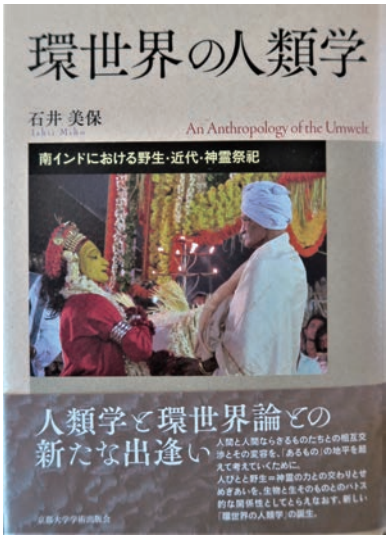

写真３　2017年２月に刊行された『環世界の人類学』